ピエール・フォシャール著「歯科外科医」

第Ⅰ巻，第Ⅴ章*

高　山　直　秀**

章Ⅴ第

白い歯を維持し，歯肉を引き締める方法．このために有用な，あるいは有害な練り薬，粉薬，および水薬

人々が通常歯を清掃したり，白くするために使っている練り薬[1]，粉薬，水薬などは良い効果を生み出すよりも有害となることの方が多いので，ここで私はいま問題としている薬と称するものの中に含まれる有害な成分を明らかにして公衆を目覚めさせ，それと同時に最も適切なものを公衆に教示しなければならない．

レンガや磁器や軽石を含んだ練り薬やこれに類した材料で作られた練り薬は決して使ってはならない．この種の薬は歯の上に塗るとまるでやすりでするように，歯のエナメル質を磨り減らし，蝕んで行く．しかし軽石はその突起部を覆って，その作用が余りにも激しく，余りにも鋭くなるのを防ぐような吸収剤を用いさえすれば使用してよい[2]．

歯を真っ白にすると評判の雪花石膏は焼いて灰にした滑石に他ならず，これから非常に白い粉を作り，この粉にイカの骨，酒石塩[3]，焼き塩，サトゥルヌスの塩[4]，焼き明礬[5]，あるいは他の似たような材料を混ぜて作る．非常に多くの人達がこの調合に欺かれて来たが，もしもその効果を徹底的に調べるなら，きっと有用であるよりは有害であることに気付くであろう．

スイバの汁，レモン汁，明礬の精[6]，礬の精[7]や塩の精[8]などは，たとえどの位の量であろうとも純粋な状態，すなわちそれ単独ではごく稀れにしか用いるべきでなく[9]，また非常に用心深く用いなければならない．なぜならこれらは通常使用後に歯の表面を黄変させ，しかもこれは治す術がないからである．この種の薬が歯に及ぼす悪影響は単にこれだけではない．これらの薬液は，しばしばまたはある期間歯に塗布していると歯を腐蝕し，虫喰い状にしたり，多数の小さな穴を空けたりして，歯のエナメル質を痛めてしまう．歯のエナメル質にこんなにも激しい効果を生み出すのであるから，ましてこれらの薬液が歯肉に触れたならば，そのためにどの位歯肉が苦しめられるかということを人々は良く理解できる．しかしペてんでいかさまな術者[10]の秘密のすべてはこのような薬を使うことにある．実を言うと，これらの薬は歯の周囲にある汚れを消失させて歯を白くする．しかし拡大鏡[a][11]で，あるいは拡大鏡なしでさえも，この様にして白くなった歯を何度も調べて見れば，人々はいかさま術者達が使った水薬が歯の

原綴および訳注

1) opiat, 初版では opate と綴り，女性名詞としている．
2)「しかし軽石……は使用してよい」の部分は初版にない．
3) sel de tartre, 炭酸カリウム
4) sel de Saturne, 酢酸鉛
5) alun calciné, 枯礬
6) esprit d'alun, 本体不明
7) esprit de vitriol, 硫酸
8) esprit de sel, 塩酸
9)「純粋な状態……用いるべきでなく」の部分は初版にない．
10) Opérateurs avanturiers et charlatans; (aventuriers)
11) この脚注は初版にない．

---

* "le Chirurgien Dentiste" par Pierre Fauchard Chapitre V du Tome I

** Naohide TAKAYAMA

フォシャールの脚注

a）顕微鏡（microscope）の一種

表面全体に与えた破壊にたやすく気付くであろう．最後にこの様に運悪く始められた仕事を齲蝕が完成させる．自分自身がこうした術者の無知の犠牲者であることをその痛んだ口腔によって証明しているような人達が毎日見られる．私はこんなにも長い間人々がいかさま師に騙されていたことに驚かされる．しかし人々は治したいのだ．そこで自分が熱望している治癒を約束する者を人々は簡単に信じてしまい，有害な薬がもたらす厄介な結果を思ってもみないのである．

自分の歯を白くしたり，奇麗にするために小さなウマの毛のブラシ，あるいはラシャやリンネルの布片を使っている人達はこうした材質が余りにもごわごわしていること，またこれらを慎みなく頻繁に使うとしばしば歯肉や歯を駄目にすることに気付かずに，それらを使っているのである．私がこの習慣を捨て，毎朝ぬるま湯に浸したごく柔らかな海綿で歯を下から上にも，上から下にも，外側からも内側からも擦って奇麗にしたあとで，口の中をぬるま湯で漱ぐことをきちんと行うように忠告するのはそれなりの理由があってのことである．またこの際ぬるま湯に1/4量の火酒[12]を混ぜるならば，さらに歯肉を丈夫にし，歯をしっかりさせる効果はより一層上がる．もし都合でぬるま湯が使えないならば，ひどい冷たさを避けるために前以てしばらくの間水の中に指を浸しておけば冷水も使えるであろう．

夜の間に歯にこびりついた残渣を除去するために羽根楊子の円い先端を毎朝使うことは適切である．滓はしばしば歯肉と歯の間に入り込んでしまうが，楊子はそこまで入れられない．この場合は指で，下顎では持ち上げるように，上顎では押し下げるように歯肉を圧迫しなければならない．

原綴および訳注；（　）内は現代仏語の綴

12) eau-de-vie

13) アオイ，ウマゴヤシに関する記述は初版にない．

14) sang dragon インドヤシからとれる赤色の樹脂，粉末にしたものは止血，収斂作用がある．

15) terre sigillée 赤味がかった黄色の細かな土．

16) 1グロ＝1/8オンス．

17) humeur acre

歯を磨くのに非常に適したものがある．それは上手に整えられたタチアオイ，アオイあるいはウマゴヤシ[13]の根の先であり，これらは歯肉を痛めることなく歯を白くする．

歯を保持するためにはこうした些細な注意では必ずしも十分ではなく，私達が捨て去った材料よりも適切な材料からできている練り薬や粉薬に頼る必要あがる．それらを次に記す．

歯のための練り薬

赤サンゴを3オンス，塊状の竜血[14]を1オンス，小粒の真珠または真珠層，イカの骨を各1/2オンス，ザリガニの目，アルメニア陶土，橙色土[15]，焼いて灰にした赤鉄鉱石を各3グロ[16]，焼き明礬を1グロ取り，これらすべてを手に触れない程の細かい粉にし，十分量の澄ませたバラ蜜の中に混ぜて，柔らかな練り薬を作る．この混合物を全量が入ると思われる大きさより2倍大きい容器に入れることに注意しなさい．その理由は材料が発酵して冬より夏にはなおさらのこと，異常に沸き上って来るからである．さらにこの混合物を1日に1～2度木製スプーンで掻き混ぜるように注意しなさい．

望むなら桂皮油や丁子油を各々4～5滴加える．これによって良い香りが増すばかりか効果をも増す．

この練り薬は歯を清掃し，白くするために，また壊血病やしばしばここに浸入する他の苦い体液[17]のために弛緩することが多い歯肉を丈夫にし，引き締めるために素晴らしいものである．その上この練り薬は歯のエナメル質にいかなる悪影響も決して与えることがない．

歯や歯肉を保持し，保存するためには，1週間に1～2度この練り薬を柔らかい海綿の上に重さにして1グロ取り，これで歯を下から上へ，上から下へ，外側からも内側からも擦る．もし歯肉をさらに丈夫にする必要があるならば，この練り薬を指先に取り，1日に2～3回ずつ，8～10日間続けて歯肉を擦りなさい．また歯を白くするためには次に記す2種の練り薬も使用できる．これらは歯を白くするのに非常に適している．

歯のための別の練り薬

調製したサンゴを2オンス，ラック樹脂[18]，竜血，阿仙薬[19]または日本の土[20]を各々1オンス，桂皮，丁子，除虫菊[21]の根をそれぞれ6グロ，紫檀，イカの骨，焼いた卵殻を各1/2オンス，焼き塩を1オンス取り，これらすべてを粉にし，絹布の篩に掛け，つぎに大理石の乳鉢の中で十分量のバラ蜜と混合する．

歯のための別の練り薬

もう一種の練り薬を作るためにはシカの角，象牙，ヒツジの足の骨，マンネンロウ，パンの固い皮をそれぞれ2オンス用意し，これらを別々に焼いて炭にする．橙色土，乾燥させたザクロの果皮，モンペリエの酒石[22]を各々1/2オンス，桂皮を2オンス取り，これらすべてを極めて細かな粉にし，篩に掛けるか，乳棒で突き，その後十分量のバラ蜜と混合する．この練り薬はしっかり栓のできる陶器の壺にしまっておき，適応のある時に使用する．

ある人達にとっては粉薬の方が一層便利であろう．私はここに優れた2種の粉薬の組成を記す．

歯を清掃し，白くするための粉薬[23]

12オンスの軽石を焼いて灰にするか火で真っ赤にし，それを乳鉢の中で粉にして斑岩の上で調製する．

さらに粗な，または普通のラック樹脂[24]を6オンス．イカの骨を4オンス，アルメニア陶土，橙色土，焼き明礬を各2オンス，桂皮を2グロ，丁子を1オンス取る．これらの材料を蓋付き乳鉢の中で粉にし，非常に目の細かな，覆いのある篩に掛ける．篩を掛け終ったなら，この粉に斑岩の上で細かくした軽石の粉を加え，すべてが良く混じるように，また十分細かくなるようにもう一度篩を通したのち，これを密封保存する．

これはほとんど湿り気のない小さな海綿に付けて用いる．

またこの粉を十分量の澄ませたバラ蜜と混ぜて練り薬にすることもできる．

歯のための別の粉薬[23]

焼いて灰にした赤鉄鉱石と赤サンゴを各1リーヴル[25]，焼いて灰にしたヒツジの足の骨，卵殻，小粒の真珠または真珠層，ザリガニの目をそれぞれ4オンスずつ取り，これらを斑岩の上で調製しなさい．さらに焼いて灰にした貝殻，イカの骨，アルメニア陶土，橙色土を各1/2リーヴル，塊状の竜血を12オンス，焼き明礬，桂皮を各2オンス，焼き塩を1オンス取る．これらを乳鉢の中で突いて粉にし，すべてが手に触れないほど細かい粉になるように，そして十分に混り合うように，さらにもう一度篩を通す．

この処方の成分毎に記した用量はこの薬を使う機会が多い歯科師にとって適切なものであろう．特別な場合には必要に応じて，各成分の割合をきちんと保ちつつ，その用量を減らすことができる．この粉薬を使いたいと思うときには，少し水で湿らせた柔らかな海綿の上に少量の粉薬を取り，これで歯を擦りなさい．

ある人達は歯を白くするために粉薬や練り薬よりも水薬を好んで使用するので，種々の好みに合わせるため，以下に2種の水薬の処方を示す．ただしその使用に当っては注意深く行い，また普通の滓よりもずっと強く歯にこびりついてしまっていて，他の方法では自分自身で除去できないような垢や黒いしみを除去する場合に限って用いなさい．

歯のための水薬

レモン汁を2オンス，焼いて灰にした岩明礬[26]，普通の塩を6グランずつ取り，これらを上薬を掛けた陶器の皿に入れ，少しの間沸騰させる．これを火から下したのち，白いリンネルの布で濾過す

原綴および訳注

18) gomme laque 東南アジアで種々の木の上に棲む昆虫（Coccus lacca）の雌が産卵時に分泌するもので，収斂作用を持つ．
19) cachou
20) terre du Japon 実体不明
21) pirêtre; (pyréthre)
22) tartre de Montpellier 実体不明
23) 初版には異なる処方が記されている．
24) lacque plate ou commune
25) livre; 現在は 0.5 kg であるが，当時は必ずしも 500 g ではなかったようなので，単にリーヴルとした．
26) alum de roche calciné
27) grain;

る．

この水薬を使用するには，柔らかな布を巻いた小さな棒を用意し，この棒を水薬の中に浸し，これで歯を軽く擦る．この際布を濡らし過ぎて，この水薬が余りに激しく歯周囲部に作用しないように注意すること．この水薬はめったに使うべきではない．頻回に使用したいと思うならば，この水薬の組成を薄め，その酸度を弱めるために，普通の水を1/4量加えなければならない．

歯のためのもう一種の水薬

前記の水薬に劣らず，同じ目的に適しているもう一種の水薬は次の様にして作る．アルモニアック塩[28]，岩塩[29]を各々4オンス，岩明礬を2オンス取る．これらを粉末にしたのち，ガラス製の蒸溜器に入れ，この粉末から水分を沸溜する．この液を保存し，上記の注意を守って，これで歯を擦りなさい．使用に当っては前記水薬の使用時と同じく慎重であるよう注意しなさい．

これらの薬剤がいかに優れているとはいえ，人々がこれらの薬を使う以前に歯を奇麗にしようという注意をしなければ，これらは歯にとって大きな助とはならない．若い頃から歯に対して払って来た些細な注意の御陰でこれらの薬が無用のもの，あるいはほとんど働く余地のないものとなることは良くあることである．

歯を奇麗にするためにアルテア[30]，すなわちタチアオイの根を推奨したので，これを上手に調整する方法を次に記す．

ある人々はタチアオイの根に赤い色を着けるために赤ブドウ酒の中や，明礬，フエルナンブルーの蘇芳材[31]，コチニール[32]等を加えた酢の中で煮たり，これに漬けたりする．他の人々はこれにオシスモモ，ミツ，砂糖等を加えてシロップを作り，一層使い心地を良くしようと，その中にタチアオイの根を一定期間漬ける．また別の人々はブドウ酒の澱[33]の中などでこの根を煮ている．しかしこれらの組成の大部分のものは根の中に十分浸み込むことも，根に十分な湿り水を保つこともできないので，後にこうした根は調整する以前と同様に乾いて固くなってしまう．それゆえ私は敢て次に述べる調製法がこれまでに発明されたどの方法よりも優れていると断言するのである．

タチアオイの根の調製法

タチアオイの根を調製して根の柔らかさと湿り気を維持するためには，この根を秋に取り入れ，一番真直ぐで滑らかな部分を選んで，望むだけの長さを切り取り，天日に当てるか，あるいは程々の暑さの所に置いて全く湿り気がなくなるまで乾燥させなければならない．次で根の外皮を石目やすり[34]，または荒目やすり[35]で取り除いて，一層滑らかにし，また以下に記す組成の液が根に浸透しやすくし，また根が容易に赤く染まるようにしなければならない．

甘扁桃油[36]または極上のオリーブ油を4リーヴル，アルカンナ[37]を1/2リーヴル取り，これらを一緒に錫鍍金した銅製の小さな容器に入れて，弱い炭火に掛けなさい．同時にこの油が燃えないように普通の水をコップ一杯分加え，これを7～8分間緩やかに沸騰させなさい．次に容器を火から外し，しばらく冷ましてから，この頃にはアルカンナの色素は油に移行しているので，アルカンナを除去しなさい．直ちにこの油の中にすり下したサッサフラス[38]，丁子，桂皮，フローレンスのアイリス，カヤツリグサ[39]，コエニドロ[40]，芳香性のシュロ[41]，白檀[42]を1オンスずつ，あらかじめ乳鉢の中で砕いてから加えなさい．その後緩やかな熱を保つために，灰を被せて弱くした火に再び容器を掛け，2～3時間おきなさい．容器を火から下したのち，タチアオイの根をこの調整液の中

原綴および訳注

28) sel armoniac 塩化アンモニウム
29) sel gemme
30) althæa
31) bois de Brésil
32) cochenille
33) lie de vin
34) rape
35) lime rude
36) huile d'amandes douces
37) orcanette
38) sassafras
39) souchet
40) coriandre
41) calamus aromaticus
42) santal citrin

に十分浸るように入れ，頻回に根を動かし，この容器を上に記したように灰をかけた弱火に1日2～3時間掛けるように注意しなさい．この液が根に染みわたるには8～10日間で十分である．その後この油から根を取り出し，適当と思われれば，また別の根を入れて液がすべて根に染み込んでなくなるまで繰り返し利用できる．タチアオイの根をこの液から次々に取り出すときに根をリンネルで良く拭かなければならない．

この種の油以上にタチアオイの根のしなやかさと柔らかさを維持するものはないうえに，この液は既に述べたような方法で芳香が着けられているので，非常に心地良い香りをこの根に与えるのである．

アオイの根やムラサキウマゴヤシの根の調製法[43]

上に述べたように採取し，調製したアオイの根やムラサキウマゴヤシの根もまた同じ使用目的に適している．以下にどちらの根にも非常に良く合う組成を示す．

アオイやムラサキウマゴヤシの根を秋に，一番真っ直ぐな部分を選んで採取し，適当な長さに切り，乾燥させ，荒目やすりか石目やすりで外皮を取り除いたならば，根の上下端を右手に持った金槌で打つ度毎に，左手で根を回しては，何度も軽く叩かなければならない．この様に金槌で叩くことによって，根の先端は一層柔らく，より房々になり，この根を次に記す組成に漬けて仕上げたときに，根の先は歯を清掃し，白く磨くのに適した，柔らかな筆か小さな刷毛の様な形になる．

普通の水をパリの目盛りで2パント[44]取り，これを十分大きな鍋の中に入れ，そこへ細切したフェルナンブールの蘇芳を1/4ポンド，桂皮，丁子，明礬を各1オンス，コチニールを2グロ加える．これらは砕いたのち，すべてを12時間水に浸して[45]おきなさい．その後この鍋を中火[46]に掛け，この組成をたっぷり15分間沸騰させなさい．鍋を火から下し，これが冷えたならば，蘇芳を網杓子で取り出す．次いで鍋の中にパリの目盛りで2パントの色着けブドウ酒[47]b)と火酒を4パント，砂糖を1リーヴル，白ハチミツを1リーヴル，ペルーの黒芳香樹液[48]を3オンス入れ，これらを木製の箆[49]で掻き混ぜる．この組成を再び中火に掛け，沸騰しそうになったところでこの中に根を十分浸るように入れる．この組成が根の中に染み込むための時間を与えるために，鍋をとろ火[50]に7～8日間掛けておきなさい．液が根に十分染みたことは液の減り加減や根の何本かを傷付けてみれば分かるであろう．その後火を強くするが，液を沸騰させてはならない．さもないと根はこちこちになり，固すぎるものになってしまうからである．時々根を動かし，回転させるように注意しなさい．このシロップ，すなわち液体が1/4量以下に減少したならば，この根を取り出し，リンネルでちょっと拭き，乾いた清潔な場所に根を並べ拡げて，自然に乾燥させる．それが済んだなら，箱の中にしまいなさい．この根はいつまでも心地良い香りを保っているであろう．

調製したいと思う根の多少に応じて，この組成の量を増減することができる．またこうした根の中で最も良質で，最も弾力性があり，最もしなやかなものは，もし適当な大きさのものを見付けられるならば，アオイの根である．

注意しなければならないのは，この第2の組成のために記した用量は中位ないし小さ目の根を500本調製するためにちょうど必要な量に相当するということである[43]．

この根をさらに赤く，より完全なものにするためには，塊状の竜血を4オンス，粒状で極上のラック樹脂を2オンス取る．これらを粉にし，16オ

原綴および訳注

43)「アオイの根やムラサキウマゴヤシの根の調整法」以下「…相当しているということである」の部分は初版にない．
44) pinte＝0.93 1
45) infuser à froid
46) feu médiocre
47) vin de tinte
48) baume noir liquide de Pérou
49) spatule
50) tres-petit feu
51) gros vin noir

b) パリのブドウ酒商が他のブドウ酒に色を着けるために使用している質の悪い黒ブドウ酒[51]

ンスの酒精[52]か，同量のハンガリー女王水[53]と混合する．このとき酒精が沸騰するので，全量が入るより1.5倍以上大きい長頸フラスコ[54]の中で混合しなさい．このフラスコにきっちり栓をし，これらの薬剤が溶けるのに必要な熱を与えるために，灰か砂を被せた火の上に，余り沸騰させずに24時間掛けておく[55]．この間溶け易くするために時々フラスコを揺らすよう注意する．

この混合物を上記の時間煎じたのち，火から下し，この煎出液を指や小さな刷毛やウマの毛の筆[56]に付けて根を擦りなさい．この最後の調整によって根はつやつやした美しい赤になる．この様にして調製した根は歯を清潔に保つために用いられる．

歯肉を再び引き締め，不快な息や口腔の悪臭を消すために好都合な洗浄液

スペインのブドウ酒，蒸溜したキイチゴ[57]の葉の汁をパリの目盛りで各々1/2ショピン[58]，桂皮を1/2オンス，丁字の蕾[59]，橙皮[60]をそれぞれ2グロ，ラック樹脂，焼き明礬を各々1グロ取り，これらすべてを細かい粉にする．さらにナルボンヌの蜂蜜を2オンス取る．これらをガラス瓶に入れ，この混合物が4日間，程々の，しかもほぼ一定の熱で煎じられるように，この瓶を暖炉の隅の灰の上に置きなさい．5日目にこの液を厚手のリンネルで絞り出して濾過し，しかるべき時に使用できるように，栓のきっちりした瓶の中に保存しなさい．

歯肉を再び引き締める必要があるときには，この液を一匙取ってコップの中に入る．初めにその半分を口を嗽ぐために使う．口の中に含んだ液を右側に遣ったり，左側に行かせたりし，しばらく口の中に含んでいる．それからこの液を捨て，残りの半分を取り，歯肉に必要な強化の程度に応じて，この液を口の中に含んでいる．この時指で歯肉を擦り，次にぬるま湯で口の中を洗浄する．同じことを毎朝起床時と毎就寝時に繰り返す．清潔を保つためにこの液を望む限り長期間使い続けることできるが，この場合には早朝空腹時に使用するだけで十分である．

この薬剤をさらに有効なものとするためには，この薬液全量に対して，白ブドウ酒と一緒に蒸溜した桂皮汁を1/2ショピン加える．

歯肉がむくんでいたり[61]，脹れていたり[62]，じくじくしていたり[63]，潰瘍ができていたりする場合には，この薬液を使用する前に歯を清掃し，歯肉の肥厚部[64]を鋏で切除し，後の章で述べるように，この部位から血液が出切るように十分血を搾り出し，さらに歯肉を全く混り物のない粉末状の焼き明礬で一度擦らなければならない．

上と同じ用途に好都合な別の浄洗液

普通の水をパリの目盛りで3ショピン取り，陶器の壺に入れなさい．これに火で真っ赤にした厚手の鉄を4回押し付け，直ちにこの水の中に粗い粉末にした桂皮を1オンス，焼き明礬を6グロ，粉末状のザクロ果皮[65]を1オンス，ナルボンヌの蜂蜜を3オンス，蒸溜したツリガネ草[66]の葉の汁，蒸溜したキイチゴの葉の汁，ヘンルーダ[67]の汁，治傷水[68]を各々4オンス，火酒を1/2ショピン加えなさい．これらすべてを良く混ぜ，壺にきっちり栓をして，前と同じ様に，暖炉の隅の熱い灰の上で48時間煎出しなさい[69]．煎じ終ったならば，この液を厚手のリンネルか，毛織製の濾し袋

原綴および訳注

52) esprit-de-vin エチルアルコール
53) eau de la reine de Hongrie 実体不明
54) matras
55)「これらの薬剤を……24時間掛けておく」の部分は初版はない．
56)「小さな刷毛やウマの毛の筆」は初版にない．
57) ronce
58) chopine=1/2 pinte　465 ml 相当
59) clou de girofle
60) écorce d'orange amére et séche
61) bouffi
62) gonflé
63) baveux
64) excroissance
65) écorce de grenade 収斂剤として用いられた．
66) mirte; (mirette) 収斂剤
67) rhue; (rue)
68) eau vulneraire; マンネンロウを始めとする種々の芳香性植物を蒸溜して得られる液．抗炎症作用がある．
69) 初版では「天日に当てるか，程々の熱さの所に置いて24時間煎出しなさい」となっている．

で濾過しなさい．そこへさらにトモシリソウのエキス[70]を2オンス加える．これを栓のぴったりした瓶の中に保存して，前記の薬液と同じ様に使用する．

著者の処方による乾燥性，収斂性，鎮静性の水薬．本剤は歯肉を引き締め，壊血病によって惹き起こされる歯肉の炎症を和らげ，歯を強化する[71]．

オオバコの汁[72]，バラ香水[73]，ミルタ[74]の汁，ヘンルーダの汁，大麦汁入りの桂皮汁[74]，極上の石灰水[75]，トモシリソウの汁，レモン汁を各々2オンス取る．そこに明礬を2グロ，粉末状のアルモニアック塩を2グロ加え，瓶を良く振って溶かす．この際しっかり栓をするように注意しなさい．

この水薬は全く生のままで用いられるが，使用時は指をこの水薬に浸しては歯肉を強く擦り，また指を浸しては歯肉を擦るという具合に何度か繰り返し，同じことを1日に2～3回行う．これを必要とする期間ずっと続ける．

もしこの水薬の原料のどれかが瓶の底に沈澱したならば，これを混合し，灰色のざら紙[76]か厚手のリンネルで濾しなさい．沈澱ができた瓶は洗浄し，ここに上の様にして透明にした水薬を再び入れる．

著者の処方による，口腔疾患の大多数に対して用いられる，アルコール分の多い，乾燥性，芳香性，抗壊血病性の水薬

良質のサルスパリラ[77]を4オンス，太いウマノスズクサ[78]，橙皮，レモンの果皮，ザクロの果皮をそれぞれ3オンス，除虫菊を2オンス，丁子の蕾を1オンス，カラシの種[79]を1オンス，カキネガラシの種[80]かカブラ[81]を2オンス取る．

これら全部を乳鉢の中で十分砕いたのち，長頸フラスコに入れる．ただし泡立つので，薬を全量入れるのに必要なものより1.5倍大きいフラスコを選びなさい．その中に粉末状の白糖[82]を1/2リーヴルと透明で芳香のある上等の蜂蜜を同量加える．その上から上質の酒精を3パント注ぎ入れたのち，何ひとつ発散しないように，このフラスコにしっかり栓をするか蓋をして，浸出[83]を行うために5～6日間放置しなさい．

次にこのフラスコを加温水槽[84]に入れ，48時間火に掛けるこの際第1日目は薬に程々の熱が加わるように，第2日目にはこれより少し強い熱が加わるようにするが，決して沸騰させないように火を加減しなさい．

これを再び冷やしたのち，フラスコを傾けて上澄をガラス瓶の中に入れ，この瓶にしっかり栓をしなさい．出し殻として残った薬に，さらに3パントの同じ酒精を注ぎ，再びフラスコに栓をして加温水槽に入れ，上に述べたようにして48時間火に掛ける．これを再び冷やし，上で行ったように，この液を同じ瓶の中に入れる．フラスコから出し殻を取り出し，これから煎液の残りを厚手のリンネルを通して絞り出し，先の煎液と一緒にする．

この煎液の半分を同じ長頸フラスコに再び入れ，そこに固有のエレキシル[85]と監督官の芳香樹脂[86]をそれぞれ4オンス，粉末にした竜血を3.5オンス，同じく粉末にした本物のガイヤック樹脂[87]，本物のペルーの黒芳香樹液を各々3オンス，粒状のラック樹脂を2オンス加えなさい．

長頸フラスコに再び栓をし，さらに加温水槽に

原綴および訳注

70) esprit de cochlearia
71) 以下の部分は初版の第4章（第2版の第5章に相当する章）には記されていない．
72) eau de plantin; (plantain)
73) eau-rose; (eau de rose)
74) eau de canelle orgée
75) premiere eau de chaux
76) papier gris; 質の悪い古紙から作る，灰色の粗悪な包装紙
77) salsepareille
78) aristoloche
79) graine de moutarde
80) semence d'éruca
81) roquette sauvage
82) sucre candi
83) digestion à froid
84) bain-marie
85) élixir de propriété 実体不明
86) baume du Commandeur; アンゼリカ，イペリクム，ミルラ，乳香，トルー安息香，ロカイ等のアルコール溶剤．出血を止め，傷や潰瘍の痂皮形成を促進する．
87) gomme de Gayac; (gaiac)

48時間入れ，上に指示した熱さにしなさい．フラスコが冷えたのちに，上澄液を栓がしっかりできる他のガラス瓶に，フラスコを傾けて取る．残りの樹脂を完全に溶かすために，このフラスコを再び加温水槽中に48時間入れる．フラスコが冷えたとき，中味を先の瓶の中に空ける．次に灰色のざら紙を一重の円錐形にして漏斗に当て，この煎液を濾過する．この時漏斗をサクランボ用広口瓶[88]の上に置き，この中に濾液を受ける．全部濾過し終ったならば，次に記す液を十分に注ぎ足せる位の特別大きなガラス瓶に濾液を移す．

治傷水と桂皮の一番汁[89]を各々3パント．

桂皮の二番汁を3パント．

ハマダイコン[90]の根と一緒に抽出したトモシリソウのエキスを4パント，

これらすべてが十分にアルコール分の多いものでなければならない．

これらの液が十分に混じり合うように瓶を良く振りなさい．この混合液を完全に透明にするために，もう一度灰色のざら紙を2重にして作った円錐で濾過し，栓がしっかり閉まる瓶に詰めなさい．

必要とする水薬の量が少ない場合は，必要量に応じて，上に述べた原料薬の量を比率を保って減量できることは今さら注意するまでもないであろう．それは容易に理解できるはずだからである．私がこの水薬をこんなにも大量に作るのは，私の所ではこの水薬を投与することが非常に多いからである．

この水薬は表題の中でも告げたように，歯肉の壊血病に対して最も有効なものである．

この水薬は歯が腫脹し，容易に出血するのを妨げ，そして歯肉を強化し，これに生気を与える．

この水薬は歯肉を構成している血管を灌流し，その中を流れている体液の極度の苦さと塩辛さを和らげる．この苦さは歯肉を蝕み，潰瘍を作り，しばしば歯肉から出血させる．すると歯肉は線維の解離のために弛緩するので，この部位から血液が逆り出る機会をますます多くし，漿液がこの部位に極めて大量に集まる機会をも与える．このことが引き続き茸状肉腫[91]や潰瘍や齲蝕を形成するのである．

この水薬の御陰でしかるべき時期が来る前に歯が動揺するようなことは起こらない．この水薬は，歯がひどく動揺したり，歯根が相当露出していない限り，これを再び強固にし，歯を歯槽の中に維持する．さらに歯を一層健康な状態に保ち，また齲窩にこの薬を滲み込ませた小さな綿球を入れれば，しばしば歯痛を和らげる．

この水薬で歯肉や口唇内側に生ずるアフターや小潰瘍を1日4～5回擦れば，これらは治癒し，そして口腔を汚染しているような悪臭は軽減する．

結局この水薬とその前の薬は著者が見付けた薬の中で，歯肉や歯の維持や治療のために最良で，最も普遍的なものである．

歯の動揺や歯槽への固定の悪さが高々中等度で，歯肉は柔らく，蒼白で，むくんでいたり，腫脹していて，経過が長く，容易に出血する人，要するに壊血病[92]の人はこの水薬を朝1回，夕食後1回，就寝時に1回使用し，歯肉が十分丈夫になるまで続けなさい，しかしその後歯肉を良い状態に保つためには毎朝1度，あるいは毎夜就寝時に1度用いるだけで十分であろう．

本剤を使用する際には7～8滴の薬を小さなコップに入れ，繰り返し何度もこの中に指先を漬け，歯肉や歯を強く擦る．

歯肉や歯の病状が軽い人や良い状態を維持したい人は，毎朝同量の薬を匙一杯のお湯と一緒にコップに入れ，これを柔らかなスポンジや指先に付けて歯肉や歯を擦りながら口の中を洗いなさい．

原綴および訳注

88) bocal de verre à cerises

89) eau premiere de canelle

90) raphanus

91) fungosité

92) いわゆるフォシャール病のこと．フォシャールは歯槽膿漏を壊血院の一種の考えており，第1巻，第22章には次の様に記している．「さらにもう一種類の壊血病がある．この壊血病についてはいかなる著者もまだ論述する注意を払っていないように思われるし，またこれは他の部分を侵すことなく，歯肉，歯槽，それに歯を侵すのである」(p. 275)

歯が不潔な人々に対しては，この水薬を使う前に歯を清掃してもらい，歯肉を洗浄する必要があると注意しておくのが良い．こうすれば水薬の効果はより迅速で，一層良いものとなるからである．

この水薬はさらに瘻孔性膿瘍[93]や齲蝕のある口を開かずにはいられなくするような別の膿瘍の手当てをするのに非常に優れている．この場合は綿栓[94]や綿球[95]や綿撒糸[96]にこの薬を滲み込ませて用いる．

この水薬を薄めずに使用して歯肉が熱くなったり，真っ赤になった場合には，こうしたことは極めて稀なのだが，普通の湯を先に述べたように混ぜて使用するか，あるいはその前に挙げた鎮静作用の強い水薬を用いる必要がある．また本水薬の使用時に鎮静性水薬を数滴加えて用いることもできる．

原綴および訳注

93) abcés fistuleux
94) tente
95) tampon
96) plumaceau